

わんぱく園児と

充実の就業体験

長崎大多文化社会学部の学生に留学先での経験を報告してもらおう「環球通信」の7回目。今回は、今年度から始まった海外インターシップに参加し、ラオスの幼稚園で就業体験をした学生からのレポートです。



「バイリンガル幼稚園」だ。毎朝7時にホテルを出て、駆け回る園児たちの相手をした。現地では、ちょうど新学期が始まったころ。幼稚園に慣れず、泣き叫ぶ子どもも少なくなかった。

9月、初めてのインターシップでラオスを訪れた。飛行機が大幅に遅れ、空港へ迎えに来るはずの車もない。私にとっ

て初の海外渡航は、ハプニング続きのスタートとなった。インターシップ先は首都ビエンチャンにあるイッサラポン幼稚園。ラオス語と英語を学ぶ



幼稚園の先生、子どもと一緒に。右端が筆者

言葉への好奇心が旺盛

@ラオス・イッサラポン幼稚園

へとへとになって、ホテルに戻るのは午後7時ごろ。2週間、ハードな日々が続いた。

ラオスの子どもたちはとてもわんぱくだ。女の子も男の子も、どんなに服が着崩れようがお構いなしで遊ぶ。最初こそ驚いたが、慣れてくると子どもを捕まえて、下着や靴をはかせられるようになった。

言葉でのコミュニケーションにも苦労した。英語で園児に話しかけたが、なかなかうまく伝わらない。ジェスチャーを交えながら、必死に自己紹介を続けた。するところれしうに私の名前を呼ぶ子が現れ、周りの子がそれをまねするようになった。園児の一人が、かわいい「通訳さん」になってくれたのだ。



ラオスの子どもは言葉への好奇心が強いと感じた。イッサラポン幼稚園では、園長先生の方針で日本語の授業も行われていて、簡単な日本語を話せる子ども。園児たちが駆け寄ってきて「おはようございます!」と喋ってくれたことは、忘れられない思い出だ。

滞在中は多くの出会いに恵まれた。ホテルのレストランで知り合ったのが、日本人観光客にツアーガイドをしているトゥイさん。一緒にナイトマーケットへ出かけ、値段交渉の心得や、便利な現地語を教わった。彼女によれば、ラオスでは値切ったのに買わないことを嫌う人が多いため、絶対に買うと決めてから交渉した方がいいそうだ。

道に迷った時には、通りかかったおじさんが「トゥクトゥク」という三輪タクシーが止まっている場所まで案内してくれた。ほかにも「どこに行くの?」と聞いてきたり、「すりが多いからバッグは前にさげるんだよ」とアドバイスをくれたり。ラオスの人はみな何かと世話好きだった。

お昼寝中の園児たちいろいろも9月、ラオス・ビエンチャン

2週間という短い間に、多くの人に助けられた。著しい経済発展が目されるラオスだが、人々の素朴な優しき、人懐っこさにも、ぜひ目を向けてほしい。(1年・緒方愛花)